11 月 30 日、山梨県富士河口湖町に日本初の災害出動型「レスキューRV パーク」がオープンしました。
メディア関係が 10 社、そして全国から RV プロジェクトに関心ある人たちが集まったオープニングセレモニーには、地元町長や知事、県議会議員、山梨県、長野県、山口県、埼玉県から防災担当や教育関係の皆さんなど、たくさんの方々に参加いただき、前泊して視察してくださった衆議院議員さんもいらっしゃいました。

前泊してレスキューRV パークを体験視察してくれたのは、衆議院議員で災害対策特別委員会理事の務台さん。今後国会議員連盟を編成しての視察を行い、全国に普及するよう尽力するとのこと。大変嬉しい応援です。

取材の人たちからも、国民の安全と安心のための取り組みだから、本来国がやるべき防災対策なのでは、という質問がありました。

その通りで、これまで長い間提案を続けていたのですが、このプロジェクトを具体的な形として提示していないから、なかなか進まないのだろうという考えに至り、見切り発車的ではありますが、まず民間の私たちが建設し、運営して先行事例を作ることになりました。

今回は国の後援をいただき、内閣府（防災担当）、総務省の関係機関の参加もありましたので、早晩いい形でのコラボができると思っています。

オープニングセレモニーの後、トレーラーハウスの内覧をしてもらってから、セミナー会場で、災害時にこのトレーラーハウスをどのように運ぶのか、平時の活用はどうするのかについての説明を行いました。全国どこにもある運送会社のレッカー車によって設置場所からわずか 30 分で搬送体制が取れること、平時には宿泊体験して防災訓練、サバイバル体験で防災力を高めることなどを説明しました。

今後、清水国明は、この全国展開プロジェクトの総合プロデューサーとして関わり、レスキューRV パークの広報、建設、平時の送客運営、人材養成、災害時のオペレーションなどのノウハウを提供するコンサルタント業務に携わります。
次に続くレスキューRV パークの建設運営を考えている人、社会貢献事業として資本参加が可能な方や法人、住民の安全安心のための確実な備えとして採用を検討したい自治体関係の方、どうぞ視察体験にお越しください。お待ちしています。

「レスキューRV パーク河口湖」
http://rv-park.p-kit.com/
0555－73－4116　担当　中西

以下は、このイベントに参加の町田厚成さんのブログから抜粋です。

【清水国明さんの『レスキューRVパーク』】

東日本大震災（2011年3月）のような、突然の巨大災害に見舞われたとき、住むべき住居を失った人たちに、とりあえず雨風をしのげる仮設住宅を提供することが急務となる。

その仮設住宅として、移動・設置が容易なトレーラーハウスを用意し、災害時に備えながら、平時は、そのトレーラーハウスを防災訓練やサバイバルキャンプを実習するときの拠点として活用するという新しいタイプのプロジェクトが発足した。

その名も『レスキューRVパーク』。

歌手・タレントとして活躍し、アウトドア愛好家としても知られる清水国明さんが提唱したもので、その発足を祝うオープニングセレモニーが2015年11月30日に、清水さんが開設している山梨県の「森と湖の楽園」で行われた。

『レスキューRVパーク』とは、すなわち“レスキュー・ビークル・パーク”の意味。

このプロジェクトで採用されることになったトレーラーハウスは、定置して使われることを前提に開発された商品だが、構造上シャシーと車輪を伴っているため、北米の基準では「RV（レクリエーショナル・ビークル）」のカテゴリーに属する。

そのため、この『レスキューRVパーク』の“RV”には、『レスキュー・ビークル』と『レクリエーショナル・ビークル』という二つの意味が含まれる。

今回の『レスキューRVパーク』は、日本RV協会が進めている「RVパーク（レクリエーショナル・ビークル・パーク）構想」とは異なるものの、平常時にはトレーラーハウスをレクリエーショナル施設としても活用できるという意味において、両者には共通点がある。

この『レスキューRVパーク』構想は、米国の「FEAM（アメリカ合衆国連邦緊急事態管理庁）が作成した“トレーラーハウスを活用した被災地支援と防災のシステム”をモデルにしたもので、「その日本版を提案したい」と清水国明氏は語る。

2005年に、巨大ハリケーンの「カトリーナ」がアメリカ南部を襲ったとき、アメリカでは住居を失った人々を救済するためにトレーラーハウスやキャンピングトレーラ

ーが動員され、被災者の簡易仮設住宅として活躍したという事例があり、清水氏が提案する『レスキューRVパーク』もそのシステムを参考にしている。

似たようなプロジェクトはすでに日本でも試みられているが、今回の『レスキューRVパーク』においては、システムを安定的に継続させるため、『ソーシャルビジネス』という概念を導入したところが新しいものになっている。

『ソーシャルビジネス』とは、少子高齢化や引きこもり問題、ニートや障害者などの支援など、現代社会が抱えるさまざまな課題をビジネスの手法で解決していく活動を意味し、この『レスキューRVパーク』においては、災害時の救援活動および防災訓練の拠点構築をビジネスのスタイルで遂行することになる。

具体的には、投資家がまず『レスキュービークル』としてのトレーラーハウスを購入。それを、（今回の例を採れば）『株式会社レスキュービークルパーク』という会社が預かって運営管理を行い、災害が生じたときは、そのトレーラーハウスを移動させて支援活動を発動する。

また、管理運営会社は、平常時にはトレーラーハウスをレクリエーショナルビークルとして活用し、その収益を投資者に回収してもらう。

その場合、投資家は回収した投資金額をトレーラーハウスの購入に再投資し、管理会社は利益の最大化を目指さず、社会的課題を解決することを優先する。

そうすることによって、災害時の支援活動が、安定して継続的に維持されると清水国明氏は説明する。

もちろん、平常時にレクリエーショナル施設として解放されたトレーラーハウスも、災害発生時には被災地に搬送されることになるため、余暇活動として利用するときは多少の制限を受けることになる。

ただ、トレーラーハウスを非常時に搬送することに関しては、その切り替えをスムーズに処理するためのノウハウを構築中であり、利用者がトラブルに巻き込まれる可能性は低いと関係者はみる。

清水氏は、今回レスキューRVパーク第1号としてスタートした『レスキュービークルパーク河口湖」を皮切りに全国展開を目指しており、全国100ヶ所ぐらいの同施設が生まれるように運動していくという。

そのため、河口湖におけるレスキューRVパークでは、社会の認知度を高めるために、これまで継続してきた各企業の防災訓練セミナーなどもさらに強化し、今回災害救援用に設置されたトレーラーハウスも、各企業から派遣された研修員の宿泊施設として有効に活用していく方針で臨んでいる。

また、清水氏は山梨学院大学の客員教授として、災害時の対応および防災への心構えなどを講義するとともに、同大学の生徒を100人ずつ合宿させて“サバイバルキャンプ”などを体験させているが、今回導入されたトレーラーハウスは、そのような活動の宿泊拠点としても使われることになる。

では、トレーラーハウスというものは、いったいどのような構造になっているのだろうか。

▼ レスキュービークルパーク河口湖には、11棟のトレーラーハウスが設置された

これまで日本に導入されてきたトレーラーハウスは、主に米国製のものが多かったが、今回採用されたものは国内企業の「カンバーランドジャパン」製品。日本人設計による緻密な作り込みと品質の均質化を保証する“ジャパンスペッ

グ’が特徴となっている。

サイズやレイアウトは多岐にわたり、ベッドとリビングスペースだけに限定されたシンプルなものから、トイレ・シャワー機能やキッチン機能を盛り込んだ高機能型のものまでさまざま。

装備内容はそれぞれ異なっていても、ボディ部分の構造はみな同じで、床下・壁・天井には100ｍｍの断熱材が充填され、戸外から襲ってくる暑さ・寒さをシャットアウト。

強度や剛性もしっかり確保されているので、「住宅」として扱った場合の耐用年数は35年程度。水道設備などのライフラインが故障したとしても、その修理などは地元の業者でほぼ解決してしまうとか。

建築確認も特に取る必要がないので、建物の設置が禁じられている国定公園内に設ける案内所などにも使うことができる。

災害が発生して、これらのトレーラーハウスが現地に救援活動におもむくとき

の所要時間は、約 1時間。

まず、ウッドデッキ部分を切り離し、次に電気などのライフラインを取り外す。その間にけん引する車両を準備。

こうして、連絡が入った1時間後には、トレーラーハウスが次々と被災地に向かうことになる。

今回のオープンセレモニーには、各地方の自治体の長や行政担当者、企業経営者などが多数出席したが、その方々は、このようなトレーラーハウスを活用する「災害時出動型RVパーク」の誕生をどう感じたのだろうか。

この「レスキューRVパークの提案に名乗りを挙げてもいい」と評価するのは、三重県のキャンプ場「伊勢志摩エバーグレイズ」の代表を務める松本寛さんだ。

「こういうシステムが日本全国に普及していけば、災害時の準備になるばかりではなく、新しいコミュニティー運営の実践的ノウハウを獲得する場として活用できる」

と松本さんは語る。

「アメリカでは、こういうトレーラーハウスを集めた施設が老人たちのコミュニティーを形成するきっかけを作っており、そこでは、生まれも育ちも異なる老人たちが相互支援を行いながら生活している。

彼らのそういう生き方を学ぶことは、地震や津波などで住む家を失った日本人たちが寄り集まったときのコミュニティー構築のノウハウを身に付けることに繋がる。今回のレスキューRVパークは、その実践的な訓練の場として活用できるのではないか」

また、B.C.ヴァーノンという北米製モーターホームの中古販売・修理を中心業務に据えている「トレックス・ガーデン」の代表者戸川聰氏は、次のように見る。

「レスキューRVパークのような構想は、国や自治体に任せていると、その実現に漕ぎつけるまでに非常に長い時間を要することになる。こういう施設は、熱い情熱と高い理想を掲げ、かつビジネスとしての採算をしっかり計算できる民間人が始めないかぎり実現しない。そのモデルケースを提示したという意味で非常に高く評価できる」

このように、今回のミーティングに参加した人は、おおむねこのレスキューRVパ

ークを諸手を挙げて歓迎し、期待を寄せているようだ。

このように、11月30日にスタートした『レスキューRVパーク」は、これまでのRV（レクリエーショナル・ビークル）の機能に『レスキュー」という意味を盛り込んだ新しいライフスタイルを創造するシステムとして、今後さまざまなメディアに注目されることになりそうだ。

『レスキュービークルパーク河口湖」

山梨県南都留郡富士河口湖町小立5606

問い合わせ 0555-73-4116　担当中西）

URL http://rv-park.p-kit.com/